

「とうとからずや」

県立神戸高等学校長
新谷 浩一

○ 創立記念式典を前にして…

長年、この世界に身を置いていても、なかなか縁がなくて1日べったりと試合を見続けたことのない部活動がいくつかあります。バドミントンもそのうちのひとつです。それでも過日、女子部員の子たちと話す機会があり、ちょうどその週末が神戸市総体で団体戦があると知りました。純粋に「この子たちの試合が観たいな」と思った私は、試合当日、朝から会場にお邪魔することにしました。会場に着くなり、部員の子たちが駆け寄り、お礼の挨拶をしてくれます。これは嬉しかったですね。

ダブルス2試合とシングル3試合で先に3勝した方が勝利という団体戦。いちばん驚いたのは試合と試合の感覚が短いこと。陸上競技の短距離であれば1日かけて予選から決勝までの3本を走ることになります。

それなりに休養の時間はあります。しかし、バドミントンの団体戦は勝ち進んでいる限り、1時間も休めば次の試合が始まるというイメージ。しかもシャトルを追い、前後左右に動き回るスポーツですからね。疲労回復は簡単ではないでしょう。

この日、神戸高校はいい試合を繰り広げました。2試合続けて完勝し、ベスト8に。その後の準々決勝と5位決定戦には惜しくも1対3、2対3で敗れましたが、公立高校としては大健闘といえるでしょう。実に見所が満載でした。

また、結果はもちろんですが、選手を後押しするベンチでの表情や、常に互いに言葉を掛け合いながら相手に向き合うコートでの姿勢、そして何よりも圧倒的に強い相手に対しても最後の1点まで諦めることなく無心にシャトルを追いかける姿も印象的でした。

全4試合を見終えて、胸にあたたかいものが残りました。それで思ったのです。「今なら130周年式典の式辞を仕上げられるぞ」って。実は式典当日まで1週間を切っているのに、その日の私はまだ式辞の締めを仕上げきれないでいたのです。「でも、大丈夫」そう思いました。



皆さんの先輩である吉川幸次郎博士は私たちの校歌に『尊からずやわれらあり』との一節を綴りました。なぜ我らは自身を尊いと言えるのか。それは歴史の糸に生をあざないて生きる、つまり歴史の糸を受け継ぎながらも、すっかり束縛はされない。多少傲慢ではありますが、そのような生き方をめざしているからです。

神戸高校の歴史の糸を大切に繋ぐとともに、小さな1本でもいいから1人1人がこの世界に自分ならではの釘を打ち付けてやろうと、生命絶えるまで足掻いてみてください。そして歴史を、世の中を動かしてください。神戸高校生は先輩方から、そのような生き方を託されているのです。先輩方の思い、繋いでくれますか。

130周年式典の式辞、私はそう締めくくりました。生徒の皆さんは私の問いかけに「はい」と力強く返事をしてくれました。式辞を終えた私に拍手を送ってくれました。それは通常の記念式典ではあまり見られない光景です。ありがとうございます。でも、あの日、他では見られないこと、いくつも見ましたね。

本校28回生の今崎幸彦さんが講演をする際、ステージ上で4名のSPがさっと四方を取り囲み、会場内はどよめきました。最高裁判所の長官というのはそのくらいこの国にとって大切な方なのですね。入場時の厳しい所持品検査もそのためのものです。一方、記念音楽会の合唱や吹奏楽演奏には数多くの卒業生の方々が集い、笑顔で参加してくださいました。その姿も尊いものでした。追いかけてい背中が目の前にあるのは実に幸せなことなのです。

